



懐手では何も始まらない 県民総動員で行動を

2 B

湊 洵菜

『秋田を活性化させよう』。もう何度も聞いたセリフです。しかし、目を瞞るような変化は起きていないように感じます。私にとって唯一無二の愛すべき故郷であり、これから先もずっと大好きな秋田。何が秋田発展のカギを握るのか、考えてみました。

まず第一に必要なのは、活性化の起爆剤です。平たく言えば、旅行者や移住者増大の決定的なきっかけを作り出すことです。しかし、ただ大都市と同じような開発を行い、秋田の魅力が失われてしまつては本末転倒です。変えていくべきところと、そのままにしておくべきところを見極め、バランスの良い開発が重視されます。

二つ目は、全秋田県民が統一されたビジョンをもつことです。活性化に成功したらどんなメリットがあり、できなければ何が起きるのかを認識した上で、目指すべき秋田を考える必要があると思います。その共通観念が、秋田発展の原動力にもなるはずですよ。

三つ目は、多方面から活性化にアプローチすることです。そのためには、県民の総動員が求められます。秋田を変えていくのに、秋田県民が懐手をしていては何も始まらないと思うからです。特に、今こそ高校生の力を發揮するべきではないでしょうか。

私は執行部として、他校の方々と秋田の未来について話し合った経験があります。自分では想像もつかないような新鮮な意見ばかりで驚きの連続だったことを覚えています。高校生は、きつと大人たちが思っている以上に秋田のことを考えているのです。しかし、高校生だけで秋田を変えるのは難しい。そこで、大人たちに、私たちを巻き込んで開発に向かつていってほしいのです。若い力を信じてほしいのです。

今回この執筆に際し、月並みな言い方ではありますが、改めてふるさと秋田を見つめ直すことができました。理想を描くだけだけでなく、一歩踏み出して行動を起こそうと思います。

みなと・じゅんな／天王南中学校出身。現生徒会長。「有言実行」をモットーに、生徒の要望を丁寧に汲み取って展開する生徒会を目指して活動中。



高齢化の切り札 パワーアシストスーツ

1 F

阿部 怜

私は、パワーアシストスーツが秋田を救う切り札であると考えている。パワーアシストスーツとは筋力を補強するための着用型の装置である。数千キロの物体を数キロの物体と同じ感覚で持ち上げることができる。

高齢化の進む秋田においては介護の現場が厳しさを増している。人口流出や少子化により介護士の確保も難しくなっている。しかし、パワーアシストスーツを使えば、それまで複数の人間でお年寄りを抱えていたのが1人だけで済むなど、少人数で施設を運営することが可能になる。

また、農業も高齢化と人手不足に苦しんでいる。「攻めの農業」はこのような状況では実現せず、TPPによって安く輸入された外国の農産物には太刀打ちできない。そこで、秋田県は平成28年度9月補正予算にパワーアシストスーツによる農作業の就労化実証試験の費用として562万5千円を計上した。パワーアシストスーツを着用することで、年齢にかかわらず少ない人手で収穫や除雪、肥料の運搬といった作業ができるようにし、農作業の負担軽減と効率化を進めることが目的だ。

さらにデータの収集も進めるべきだ。全国で最も高齢化の進む秋田は他県に比べてパワーアシストスーツを活用する場面が多く、サンプルとして最適な地域と言える。介護や農業の現場で実際に使ってみての要望や改善点をデータとして記録し、そのデータを各メーカーに販売するようになれば、秋田にデータビジネスという新たな産業が生まれる。中国などの国々でも高齢化が始まると言われており、秋田で蓄積したノウハウを海外に輸出するということもあり得る。秋田がデータの拠点となれば雇用が増え、若者の県外流出を食い止めることにつながる。パワーアシストスーツは人間の筋力だけでなく、地域をも補強する。秋田が「パワーアシストスーツ先進県」になることを願う。

あべ・れい／外旭川中学校出身。物理部に所属。科学の甲子園全国大会出場を目指し11月、秋田県代表選考に出場予定。2年生では文系コースを選択している。